

最 終 試 験 の 結 果 の 要 旨

神奈川歯科大学大学院歯学研究科 歯科矯正学講座 多胡親孝 に対
する最終試験は、主査 玉置勝司 教授、副査 木本克彦教授、副査 槻木恵一教授に
より主論文ならびに関連事項につき口頭試問をもって行われた。
その結果、合格と認めた。

主査教授 玉置勝司

副査教授 木本克彦

副査教授 槻木恵一

論文審査要旨

歯科医院に来院する患者の睡眠ブラキシズム時の咬合接触状態に関する実態調査
ーブラックスチェッカーを用いた研究ー

神奈川歯科大学大学院歯学研究科
歯科矯正学講座 多胡親孝
(指導：河田 俊嗣 教授)

主査教授 玉置勝司

副査教授 木本克彦

副査教授 槻木恵一

論文審査要旨

ブラキシズムによる力学的負荷は、様々な歯科的問題を引き起こすことが知られており、歯科的咬合治療のあり方を考える上で大きな課題となっている。日常臨床ではブラキシズムによる生体への為害性を排除し、機能的に良好な咬合関係を構築することが重要であると指摘されているが、咬合状態とブラキシズムとの関連性などの実態については不明な点が多く臨床的な咬合治療についてのガイドライン策定には至っていない。そこで本研究では、歯科医院に来院する患者 49 名の総合診断のために採得したセファログラム、コンダイログラフによる顎機能分析、睡眠ブラキシズム時の咬合接触を分析する BruxChecker などの検査資料を用い、歯の接触状態と骨格形態の関連について調査した。被験者 49 名、計 98 側の BruxChecker の接触パターンの評価を行った結果、約 80%が大臼歯部までの接触を認め、加えて約 96%の平衡側接触を認める咬合状態であった。BruxChecker の接触面積の計測を行い、1 被験者から 2 つ採得した面積の変化を調べた結果、とくに 0-10mm²の範囲内が 45%を占めていた。また、接触パターンが変化した被験者は、44 名中わずか 5 名であったことから BruxChecker の再現性は比較的高いことが分かった。BruxChecker の接触面積と骨格形態との関連の検討では、前歯部咬合平面が平坦になるにつれ歯の接触面積が大きくなる傾向であった。また、overbite との関係では、overbite が大きくなるにつれ、歯の接触面積全体に占める前歯部接触面積の割合は大きくなる傾向であった。これ対して、接触面積全体に占める大臼歯部接触面積の割合は小さくなる傾向であった。咬合平面と咬合の垂直的要素である ODI との関係調べた結果、咬合平面が急峻になるにつれ、ODI が大きくなる傾向であった。また、ODI と overbite との関係は ODI が大きくなると overbite が大きくなる傾向であった。歯の接触面積の大きさで Large、Moderate、Small にグループ分けをし、各グループ間での前歯部、小臼歯部、大臼歯部の接触面積の差を調べた結果、前歯部の Large と Moderate グループ間には有意差は認めなかったが、その他の全ての項目について各グループ間で有意差を認めた。前歯部、小臼歯部、大臼歯部各領域の面積の大きさによる分類を行って検討した結果、前歯部から大臼歯部へいくにつれて接触面積が大きくなる傾向が 63%を占めた。以上のことから、ブラキシズムによる歯の接触面積は、前歯部咬合平面と overbite、ODI の垂直的要素が深く関係しており、ブラキシズムを考慮した咬合治療をする際には、前方歯群によって歯の接触をコントロールすることが可能であることが示唆された。

本審査委員会では、本研究が未知なことが多い睡眠ブラキシズム時の咬合接触の実態を解明するため、実際の患者の咬合接触状態について明確にしたことを高く評価した。また、これらの結果は歯科臨床における診断と治療計画立案、術後安定した長期経過に極めて有用な示唆を与えるものと判断した。

よって、本審査委員会は申請者が博士（臨床歯学）の学位に十分値するものと認めた。